2017年9月5日

核兵器廃絶をめざす
富山医師・医学者の会 会報

2017. 9. 5
核兵器廃絶をめざす
富山医師・医学者の会
富山市桜橋通り6-13
電話　076-442-8000

8/11　**核のない世界を未来の子どもたちへ**

アニメ映画「風が吹くとき」上映と被爆講演「次世代へ繋ぐ思い」

司会を務めた
与島明美 世話人

アニメ映画「風が吹くとき」の１シーン

８月１１日、核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会（以下反核医師の会）は、アニメ映画「風が吹くとき」上映と被爆者の講演のつどいを開催しました。

会場となったタワー１１１スカイホールは８０名の参加者でいっぱいになりました。司会を反核医師の会の与島明美世話人が務め、主催団体を代表して反核医師の会の金井英子世話人代表が挨拶をしました。

映画の登場人物は、イギリスの片田舎で年金生活をおくっている老夫婦。冷戦下の世界情勢は日に日に悪化の一途をたどり、ある日、

主な内容

●映画「風が吹くとき」上映と被爆者の講演のつどい　参加者の感想（映画）……２
主催者挨拶（金井世話人代表）
●「特攻ボート訓練と被爆直後のヒロシマ」　被爆体験　田島正雄氏……３
●「被爆者の思いを伝える橋渡しを」　二世の会会長　小島貴雄氏……４
参加者の感想（講演、二世の会発足）……５
●核兵器禁止条約が採択、核保有国や核の傘の国々に批准を迫る取り組みを……６～７
●故肥田舜太郎先生を偲ぶ　……８

戦争が勃発したことを知った夫婦は、政府が発行したパンフレットに従い、保存食を用意したりシェルターを作るなどの準備を始めます。そして突然、ラジオから３分後に核ミサイルが飛来すると告げられました。

シェルターに逃げ込んだ夫婦は爆発の被害からは辛うじて免れましたが、放射線に蝕まれ日に日に弱ってゆきます。互いに励まし合いながら政府の救出を信じて疑わない姿が哀れでした。

映画上映後、県被爆者協議会の田島正雄氏が広島での体験を話され、被爆二世・三世の会の会長に就任した小島貴雄氏が、今後の決意を述べました。

参加者の感想から

●ゆったりとした暮らしが一発の核ミサイルで大きく変化した。何の情報もなく、老夫婦は、いつしか核の被曝で、少しずつむしばまれてゆく、どこからの情報もなく、ついに死んでいった。とても悲しい。

●淡々と進んでいく物語の中で、核兵器の怖さがこれほど伝わってくる映画は初めて。原発の怖さも、この物語のように進んでいるのではないか？　きちんと備えをしていて「大丈夫」と思った二人を笑えない。最近「北朝鮮のミサイル攻撃に備えて」という訓練が行われたことを思い出しました。核をなくすことこそが、万全の備えなのでは、と思います。

●「風が吹くとき」は何年か前に見たことがあり知っていましたが、今回、大きなスクリーンで見て、とても強烈に迫ってきました。すばらしい映画です。

●「八月六日」「八月九日」を知らない世代が多くなっている時、また「北朝鮮」そして「アメリカ」の政権による「ことば」が今の世界を暗くしています。今日再び「風が吹くとき」を観させていただき、核の恐怖を感じました。日本人として当然持っていなければならない感情です。戦争はダメだ！

これからも被爆者の思いを語り継ぐために

主催者あいさつ

世話人代表　**金井　英子**

広島・長崎への原爆投下から７２年が経ちました。７月７日国連会議で核兵器禁止条約が採択されました。この時初めて被爆者の受けた苦しみが条約前文に明記されたのは画期的な事でした。しかし残念ながら日本は制定交渉に参加しませんでした。

８月９日、長崎平和宣言では田上市長は政府に対して条約への１日も早い参加と米国の「核の傘」に安全保障を依存する政策を見直すように訴えられました。私は市長の意見に全く同感であり、ここで再度みなさんにお伝えさせて頂きます。

私たち一般市民が、いかにして粘り強く政府に、社会に対して核兵器の悲惨さを訴え、核兵器廃絶を求めてゆくかが大切と思います。また、次々に再稼働される原発に対しても引き続き反対の声を上げてゆきたいと思います。

この会では映画上映と被爆者の講演のつどいを毎年行って参りました。過去に被爆体験をお話いただいた方たちの事を述べさせていただきますと、水野さんは既に亡くなられました。また田中さんと柴田さんはご病気のために体験をお話なさることは出来ないと聞いております。岸川さんは少し耳が遠い以外にはお元気で、先日「ＮＨＫニュース富山人」で核兵器廃絶に対する強い思いを語っておられました。そのような状況であり、被爆者の高齢化と減少が避けられない現状です。

本日講演いただきます富山県被爆者協議会会長の田島さんは、「活動を継続するためには被爆二世の協力を得るしかない」と判断され、先日「被爆二世の会」を立ち上げられました。私は被爆二世です。私の父は広島で被爆しました。そのような事情で私も立ち上げに関わらせて頂きました。この後、田島さんにはその間の経緯もお話頂けると思います。

では、宜しくお願いいたします。

特攻ボート訓練と被爆直後のヒロシマ

富山県被爆者協議会・会長　田島正雄氏（富山市）

被爆者協議会の田島です。

私は昭和３年生まれ、小学校の国語教科書には初めは「咲いた咲いた桜が咲いた」とあったものが、１～２年のうちに「すすめ、すすめ」と変わりました。支那事変の頃です。昭和１６年に大東亜戦争が始まり、中学生だった私らは岩瀬にある工場に寝泊まりして石炭運びをやっておりました。

江田島で特攻ボート訓練中に

戦況は次第に悪化し、私はお国の為と思い１７歳で入隊し、香川県の小豆島にある「陸軍船舶特別幹部候補生隊」の、特に少年兵だけの「若潮隊」に配属され、４カ月の特訓ののち、広島・江田島の四五戦隊に派遣されました。その部隊は特殊なところで、長さ６メートルのモーターボートに２５０キロの爆雷を積んで体当たりする。ボートは敵の電波探知機にかからないようベニヤ板で、訓練は夜ばかり行っていました。

そして８月６日の朝、兵舎の前におりましたら、突然ピカーッと光りました。朝なのにおかしいな、と思っていると、ドカーンという轟音とともに私の体もかなりの衝撃を受けました。蒲鉾型の兵舎の窓はすべて吹き飛び、これは何事が起きたかと思って広島の方向を見ると、あの、キノコ型の雲がゆーっくりと、むくむくと上空に上がってゆきました。１１時ごろ、敵の新型爆弾である、とだけ知らされました。そして私ら四五戦隊中川中隊は、司令部のある広島の宇品に駆け付けました。

１日目は民間人の救出

上陸用舟艇で宇品に揚がりましたら、係留場にたくさんの兵隊さんたちが頭から血を流して苦しんでおりました。私らは民間人の救助を命令されていましたので、大きな川にそって歩道を進み、そこに倒れている人や火傷を負っている人を運んで寝かせました。すぐ近くにあった広島工業高校が倒壊、４、５人で行き、１０数名をがれきの中から救出しました。夕方になって民間人の救護にあたりましたが、私らが持っているのは水だけです。火傷の人たちは必死で水を求めてきます。兵隊さん、水くれーという声が至る所から聞こえましたが、軍の命令で水をあげることができませんでした。飲ませるとすぐ死ぬからだ、とのことでしたが、非常に胸が痛みました。

暗くなるとつぶれた家屋からどんどん火の手が上がり、私たちのいた場所へも火の粉や煙とともに、今思えば原爆の灰が舞い降りてきていたと思います。１～２年前に私のところに広島大学の方がその時の灰の状況について聞きに来られましたが、当時は無我夢中で煙やら灰やらわかりません。夜になって炎の

ベニヤ板製の特攻ボート「お国のため」の命とは？

（朝日新聞 8/12）

太平洋戦争末期、飛行機だけでなく船による「特攻」が行われた。爆雷を積んだベニヤ板製の簡易なボート。訓練を重ね、死を覚悟していた若者たちは揺らいだ。「お国のため」に捧げる命とは何なのか、と。（岡本玄）

瀬戸内海に浮かぶ江田島（広島県江田島市）。海軍の兵学校があったことで知られるこの島は、かつて陸軍の「水上特攻隊」の秘密基地でもあった。島の最北端にいま、その歴史を伝える石碑が立つ。（以下、略）

明かりを頼りにひどい火傷で膨れて青くなっている人たちを見回りましたが、朝になるとその人たちはみんな亡くなっておられました。本当に悲惨でした。

川幅いっぱいに溢れる遺体

翌日は爆心地に向かいましたが、地面が熱く臭いも強い。大きな川の川幅いっぱいに、火傷で膨れ上がった人たちが、二重三重に重なって溢れていました。干潮で川の水が引いた後、川に入ってその人たちを陸揚げしました。しかしどれだけ運んでも、満潮になると何処からともなく人が流れてくるんです。私たちも休憩したいし腹は減る一方でしたが、それどころではありませんでした。その時一緒だった台湾出身の少年兵から、戦後しばらくたって手紙が来ました。「あの時、川の中から引き上げるのが大変だったなあ」と。３年ほど前ＮＨＫの記者が私のところに来た後、これから台湾に行くと言うので彼の名前を出したところ、まさに本人でした。

黒焦げの遺体を素手で運ぶ

次の日、中心地に向かおうとしますが、至るところガレキでどの道を行けばよいのかわかりません。そこで市電のレール沿いに進むと電車があったので中を覗き込むと真っ黒に焦げた遺体だらけでした。しばらくして学校のグラウンドだったと思われる広い場所に来た時、そこに遺体を集めることになりました。

その日から数日間、焼けるような炎天下で遺体を運び、焼くという作業が続いたわけです。男女の区別もわからないほど黒焦げになって、何かの陰とか窪みなど引っ込んだところに遺体はありました。少しでも爆風や炎を避けようとしたんでしょう。担架も戸板も、手袋もありませんから運ぶのは素手です。小柄な遺体を抱え上げた時、手にぬるぬるとした温かいものが伝わってきました。表面は黒焦げなのですが、お腹の腸や内臓はそのままの状態でした。本当にむごいことです。

グラウンドはあっという間にいっぱいになりました。私たちの寝る場所もなく、遺体と添い寝でした。真夏で遺体が腐敗していく臭いは強烈でしたが、しまいにはまったく感じなくなりました。夜は焼却作業です。人間の身体を焼く炎が唯一の灯りで、そこに照らし出される情景が今でも脳裏に浮かび涙が出ます。どれだけ集めても、どれだけ焼いてもきりがない。そうした作業が何日も続きました。

下痢や歯ぐきから出血が

幸いというか、水道は無事でしたので、夏ということもあり私たちは浴びるように飲みました。しかしその水は放射能に汚染されていたのです。５日目から下痢症状が出始め、歯ぐきから血が出ました。髪の毛が抜け始めたのはもう少し後です。私らはそれが原爆のせいだと思う由もありません。そうして６日目あたりで本隊へ帰還命令が出て市内を後にし、その２日目に玉音放送を聞きました。それから９月の半ばまでの間、私たちが訓練していた「マルレ」と呼んでいたボートを陸に揚げて焼却する作業をしたのち、復員できたわけです。

私たち被爆者は、こうした悲惨な被爆体験を何とか語り継いできましたが、この夏二世・三世の会が発足したことで、これからも命あるかぎり続けていきたいと思っております。

参加者の感想から

●二十二歳まで広島で育ちました。母は被爆していて、私は被爆二世です。小さい時から原爆の話ばかり聞いて育ったので、田島さんのお話を懐かしく、悲しい思いで聞きました。昨年からこの会に参加しています。富山に二世の会が出来たというので、是非参加せねばと思い、出席しました。

●私は、一九四五年七月に上海から引揚げ長崎に住んでいました。小学六年でした。被爆地から五Ｋｍ離れていて幸い無事で、今日まで過ごす事が出来ました。この様な会に参加したのは初めてでした。有意義な催しに参加出来た事を感謝しています。

●祖父が長崎被爆で死んだと聞いています。富山に戻って死んだため、被爆者の認定を受けることができず、残された家族は苦労したとのこと。しかし、どんな状況で、どんなふうに死に至ったかは詳しく知らず、今思うと被爆者への偏見もあり、あまり話するような状況ではなかったのかもしれないです。なんとなく他人事でなく身近に感じています。これからも二度と悲しい出来事が繰り返されないよう願っています。

●田島さんのお話は、経験者でしか語れない貴重なお話の数々、テレビとかでよく拝見しますが、生のお話はやっぱり違います。聞くことが出来て良かったです。

被爆者の思いを伝える橋渡しを

富山県被爆二世・三世の会会長　小島貴雄氏（射水市）

私の父も、今ほどお話しされた田島さんとほぼ同じ状況でした。

学徒で招集され、フィリピンで訓練中たまたま昇級試験に受かって本土に戻りました。残った仲間はほとんどフィリピン戦線で戦死したと聞いております。

日本に戻った父は訓練中にたまたま肺を患い１カ月ほど入院したため、訓練生として１期遅れました。病気の前に同期だった仲間は沖縄戦線に赴いて、ほとんどの方が命を落としたそうです。そんな仲間を持った父です。

昭和２０年６月から父は、下士官として広島で特攻ボートの訓練をしておりました。そのまま戦争が続いていれば、やがて自分も特攻として命を落とすという覚悟であったと思います。そんな父が８月６日に江田島で原爆投下に遭遇し、広島市内に入り、負傷者の救護やおびただしい死体の焼却という作業に携わりました。

父の強い思いを知ったからには

しかしこんな大変な思いをしてきた父の思いを引き継いでこなかったのがこれまでの私でした。たまたま定年退職で時間ができ、父と被爆の話をすることがありました。

フィリピンで死んでいたかもしれない、沖縄で死んでいたかもしれない、広島では爆心地に近いところに入ったけれども幸い原爆症が現れない状態で今日いるということ。たまたま生かされている命、自分が感じたことを一人でも多くの人に知ってほしいという強い思いを持っている父を、６０歳になって初めて知ったというのは恥ずかしい話です。

そんなとき田島さんを始めとする被爆者の方たちから、自分たちの叫びを広めたいけれどももう年齢的にきつい、助けてほしいという声が届きました。私は、自分で良ければ協力を惜しまないという気持ちで、会に参加させていただきました。

二世・三世の会としては、被爆者の叫び、手記の補足作業をすすめながら、まだ訴えておられない方たちの声を収集し、これから学ぼう、追体験しようという人たちに、身近にこんな人たちがいたということを伝える橋渡しをする使命にあずかりたいと思っているわけです。われわれ二世、三世だけでなく、関心のある方たちの協力を仰ぎながら、再び核兵器の惨状が起きないよう微力を尽くしてまいりたいと存じます。

県内二世・三世の会発足　会長の小島さん「私たちの使命」

（北日本新聞 8/14）

当時の資料を手に、父親の六雄さん（右）と戦争の記憶を語り合う小島さん

（前略）会長になった小島さんは、父親の六雄さん（93）が原爆投下直後の広島市に入った。六雄さんは部下約10人を率いる陸軍の小隊長で、同じ中隊には田島さんもいた。小隊は初日こそけが人の救護に当たったが、2日目からは死体を燃やすのが任務になった。

広島の街には幾本もの煙が立ち上がり、六雄さんたちは夜になると死体を焼く火で手元を照らして食事を取ったという。（以下、略）

核兵器禁止条約が採択、核保有国や核の傘の国々に批准を迫る取り組みを

核兵器禁止条約のポイント

【前文】
- ○ 核兵器の被爆者の受け入れがたい苦痛と損害に留意

【禁止内容】
- ○ 核兵器の開発・実験・生産・製造・取得・保有・貯蔵を禁止
- ○ 核兵器の使用、および使用するとの威嚇を禁止
- ○ 条約で禁じられた活動の援助および援助の要請・奨励・誘導を禁止

【保有国の核措置】
- ○ 核兵器を保有・管理する国は直ちに運用上の地位から除外し、第１回締約国会議で決定された期日までに速やかに核廃棄する

【締約国会議】
- ○ 条約発効から１年以内に締約国会議を開く、以降は２年に１回のペースで開催する
- ○ 締約国会議には非締約国も招待される

【被害者支援・環境回復】
- ○ 締約国は核兵器の使用・実験による被害者に適切な援助を提供
- ○ 締約国は核兵器の実験や使用で汚染された地域の環境回復へ適切な措置を取る

【発効要件】
- ○ 50ヶ国が批准した時点から90日後に発効

安倍首相、核兵器禁止条約の意義に触れず

８月６日、今年のヒロシマ原爆の式典は、核兵器禁止条約（以下条約）採択を受けて核廃絶に向け大きな一歩を踏み出したことを歓迎する声に包まれました。

式典では中満泉国連事務次長によって「被爆者の努力が核兵器の壊滅的な影響を世界に強く印象づけ、核廃絶運動に貴重な貢献をした」とのメッセージが読み上げられると、満場の拍手がわき起こりました。

ヒロシマの式典で壇上から去る安倍首相

また松井一実広島市長は平和宣言で、「日本が核保有国と非保有国の橋渡しを本気で取り組むべき」と訴え、政府が放置してきた橋渡し役を今こそ実行に移して欲しいと迫りました。

ところが安倍首相は挨拶で条約に一切触れること無く壇上を後にし、参加者の怒りと反感を買いました。

９日のナガサキ原爆の式典では、田上富久長崎市長が、国連の条約交渉会議をボイコットした日本政府にたいし、「交渉会議にさえ参加しない姿勢を被爆地は到底理解できない」と痛烈に批判しましたが、安倍首相は保有国と非保有国の双方に働きかけ国際社会を主導する、と従来の見解を述べただけで、条約をめぐる具体的な提案には踏み込まず、ここでも参加者に深い失望を与えました。

条約採択の背景と条文のポイント

今回の条約は、今年の３月に交渉会議が始まり、７月７日に１２２カ国の賛成を受けて採択されました。条約の構想自体は以前から練られていたものの、具体的な議論開始からこれだけのスピード成立となった背景には、国際的なテロ組織の台頭や、NPTの枠外で核武装を続けている国々の存在によって、核兵器の使用が現実的な脅威として差し迫っていることが大きく影響していると思われます。

今回の条約の特徴として、本文はもとより前文に核廃絶に向けた切実な願いが色濃く表れている点が挙げられます。前文では「核軍縮の遅い歩みに加え、軍事や安全保障上の概念や教義、政策における核兵器への継続的依存が懸念される」とし、NPTだけでは核軍縮は思うように進まず、北朝鮮やインド・パキスタンのような核武装国を許してしまっており、全廃こそが核兵器を二度と使われないようにする唯一の方法と断じています。

いっぽう本文では、開発・所有から使用の威嚇（核抑止）まで、核兵器に関するあらゆる行為について厳格に禁止規定を設け、条文の抜け穴によって条約が骨抜きとならないように留意されています。保有国の参加を促すため、一定譲歩するような事前の推測もありましたが、結果として最大限の規制を課したうえで、国際世論によって参加を促すという方針が取られています。

今後の運動と被爆国日本のあり方

長崎大学核兵器廃絶研究センターはこの条約を評価し、下記の見解を発表しています。

「この条約の最大の意義は、核兵器に『悪の烙印』を押したことにある。核保有国や核の傘の国が背を向けている現状では廃絶はすぐには難しいが、核の威嚇までも違法として制定した意義は大きい。核抑止に依存する安全保障論が国際社会で批判の対象となるだろう」

「日本政府はこれまで再三、保有国と非保有国の橋渡し役を果たすと公約してきた。今がまさに絶好のタイミングであり、核廃絶の検証システム作りや、新たな核軍縮・不拡散ガバナンスの構築、核抑止にできるだけ依存しない安全保障システム構想、さらには核兵器の近代化をはかる同盟国アメリカへの進言など、重要な役割を果たすべきである」　（編集部で要約）

これまで非人道性を理由に、生物化学兵器や対人地雷、クラスター爆弾など様々な兵器が国際条約で禁止され、それによって人々の意識も変わってきました。今回、核兵器が非人道的兵器に加えられたことで、リスクヘッジのため核兵器の数をいかに減らすかというこれまでの議論から、国際的に違法な兵器をどう廃絶するかという議論へと質的に変わっていくことが期待されています。

長崎の田上市長は９日の式典で「これはゴールではない。ようやく生まれた条約を活かし、歩みを進めることができるかが今人類に問われている」と参列者に訴えました。

米国など核保有国は、条約がいかに無駄で有害であるかのネガティブキャンペーンを始めています。被爆者の切実な願いを引き継ぐ我々日本人は政府にたいし、保有国の圧力に屈せず被爆国日本として今こそ本気で橋渡し役を担うことを訴えていくことが求められています。

被爆者医療に尽くした 肥田舜太郎 医師逝く

ヒロシマで自身が被爆しながらも被爆者に寄り添った治療を続け、核兵器廃絶に生涯をかけた肥田舜太郎先生が本年3月20日に亡くなられました。享年100歳。

先生は1945年8月、軍医として広島の陸軍病院に赴任。往診中に広島郊外で被爆しました。戦後、東京や埼玉で開いた診療所や日本被団協の中央相談所で被爆者の治療や健康相談にあたりました。

入市被爆による被爆被害の証言や、放射線被爆による後遺障害について訴え、全国各地の原爆症認定訴訟での証言活動に力を注がれました。また、東日本大震災を受け、内部被ばくの影響と原発の危険性について、90歳を超えて精力的に講演活動を行なってこられました。

1989年の当会の設立記念講演会では講師を務められました。

ご冥福をお祈りいたします。

と　き　**11月4日(土)〜5日(日)**

ところ　平和と労働センター全労連会館
（東京都文京区湯島2-4-4）

主　催　核戦争に反対する医師の会

参加費　医師・歯科医師…**5,000円**

●参加申込やお問い合わせは、
核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会まで

電話　076-442-8000

会費納入のお願い

私たちの会の活動は、会費によって支えられています。活動の基盤となる財政を確保するため、先生の入会ならびに今年度会費の納入をお願いします。

会の趣旨に賛同し、入会を了承される先生は、ＦＡＸまたは電話でその旨ご連絡ください。会費納入用郵便振替票をお送りします。

◇年会費　５，０００円（毎年７月が期首）
◇振込方法
「郵便振替票」をご利用下さい

編　集　後　記

●被爆者協議会の田島さんは、配属された江田島で多くの富山出身の先輩から声をかけてもらい心強かったという。その中に二世の会の小島さんの父上もおられた。

●特攻といえば「ゼロ戦」「回天」が知られているが、「特攻ボート」についてはこの夏、朝日新聞が特集した。十代の若者たちを捨て身で敵艦に夜襲させる作戦だった。非現実的でいたずらに命を失う行為に心が痛む。

●特攻ボートで散ったかもしれない二人は、原爆投下によって生き永らえたことになるのだろうか。戦争は生き残った人たちに皮肉な運命を背負わせる。　（Ｓ・Ｍ）